

ロレンス序論 (I)

—— 彼の^{セックス}性の思想について ——

吉 沢 貞

芸術の認める価値は、因襲を破る処にある。因襲の圏内にうろついている作は凡作である。因襲の目で芸術を見れば、あらゆる芸術が危険に見える。

——「沈黙の塔」——

I. ま え が き

II. ロレンスの性の思想(1)——その形成

1. 時 代 背 景

ブラッド マインド

2. 血 と 知

セックス

3. 性

オブスィーニティ

4. 猥 褻

モラリティー

5. 道 徳 律

III. ロレンスの性の思想(2)——その発展

IV. ロレンスの性の思想(3)——その到達

V. む す び

I. ま え が き

D. H. ロレンス (1885—1930) は、その短い流転の生涯の中で数多くの作品、即ち、長篇小説、短篇小説、詩、評論、エッセイ、旅行記などを書いた。しかも、驚くべきことにはこれらの作品は、ある意味では皆同じであると我々は言い得るのである。というのも、彼独自の性の思想が、彼の全作品に一貫して流れているからである。

「ぼくの信じる偉大な宗教は、知性よりも賢明なものとして、血や肉を信じることです。ぼくたちは^{マインド}頭脳の中では誤りを犯すこともあり得ます。

しかし、ぼくたちの血が感じ、信じ、そして言うことは、常に真実なのです。知性などは邪魔になるだけです。ぼくは知識などには何の関心も持ちません。ぼくが求めているものは、^{マインド}精神や道徳などの下らない干渉を受けずに、直接にぼくの血に答えることなのです。ぼくは男性の肉体とは一種の炎——不斷に真直に立って流動するローソクの炎のようなものと考えます。そして知性とは、周囲の事物の上に投げかけられた光であるに過ぎないと思います……」とロレンスは無名時代に言っているが¹⁾、これは既に彼の生涯を貫いた思想の方向をはっきりと示している。彼は、現代の慣習の二重性の中に、精神と肉体との間、頭脳と感覚との間を隔てる障壁を発見したのである。彼によれば、我々同時代の者は、単に男女間の関係ばかりでなく、両性間の信頼と理解のほとんどすべてをも失ってしまっている。それらの失われた信頼と理解とを回復させるために、我々は、自然の根源的生命との交渉を求めなければならない。そして、それに到達すべき最も容易にして、最も根本的な方法は男女間の肉交である。彼のこのような思想が達成された時、相互間の血の交わりを失って因襲的、形式的、金銭ずくの交わりしか知らなくなっている我々同時代の者は、真に平和で健康な社会を創ることができると言うのである。

しかし、現実には彼の理想とは程遠かった。彼はその最初の人間的経験において、既にエディプス・コンプレックスをもっていた。彼は、言わば、セックスのために、初めから傷ついた人であった。つまり、彼の母親は、気質の点からも、育ちの点からも、彼の父親とは全くかけ離れたタイプの人であったので、夫に絶望し、代りに息子を溺愛したのである。息子は、母親にとって“Sons and Lovers（息子で恋人）”であった。兄の死後、母の愛を一身に受けたロレンスは、当時親しくつき合っていた女性を真に愛することができず、遂には失恋してしまう。母の死後、故郷を離れ、ドイツに職を得るため、大学時代の恩師を尋ねたロレンスは、この時、彼の妻フリーダと恋に落ち、かけ落ちして結婚するに至るのであるが、この恋愛事件は、炭坑夫の息子でわずか25才の無名の青年と3人の子を持つ年上の著名大学教授夫人との姦通事件であるから、かけ落ちしながら新しい性

の思想を絶叫したロレンスは、ヴィクトリア朝の上品な平和な伝統を受けついできた英国社会にとっては、紳士どころではなく、汚らわしい、不潔そのものの男でさえあった。そして引続き出版された彼の著作の多くも、汚らわしい、不潔そのもので、猥褻でさえあり、更には、彼の著作の幾つかは発売禁止の憂き目を見たのであった。失望したロレンスは、彼の「ユートピア」を求めて、世界各地を巡礼した。しかし、「ユートピア」は、文字通り、ユー（no）・トピア（place）であった。同時代の人々に受け入れられぬ思想をもち、生まれて2週間以来病身であったため、妻フリーダとの関係においてすら自分の理想を実現できなかったロレンスは、「チャタレー夫人の恋人」「死んだ男」「エトルリアの遺跡」「黙示録」などの著作に彼の思想を最終的に結晶させて我々に残しつつ、1930年に、その苦難にみちた44年の生涯を終えたのである。

（注）1. 1913年1月17日付 Ernest Collings への手紙

Ⅱ. ロレンスの性の思想(1)——その形成

1. 時 代 背 景

ロレンスの思想が、彼の死に至るまで、彼が生きた時代の制約の下において形成されたと言うことは、言うまでもないことである。この意味において、我々は、彼の誕生に先立つ時代、彼が誕生し、少年時代を過ごした時代——19世紀——のイギリス社会を知らねばならない。では19世紀イギリス社会とは如何なるものであったろうか。ロレンスにとって、それは、浪漫主義の大きな嵐が世紀の初めより吹き始め、間もなく安定してヴィクトリア朝の繁栄となり、遂には、擬似科学的精神、資本主義的精神、機械主義文明が勝利を得た社会であった。そして、これらの時代思潮によって形成されたものが、いわゆるヴィクトリア朝道德律——極度に人間の肉体を蔑視し、更にはまた、その言葉を印刷することも、言うことを禁じてしまった、ヴィクトリア朝道德律であった。

リチャード・オールディントンが、述べているように、ヴィクトリア朝の人々は、特に前期においては道德的にはピューリタンで、厳格な道德を

規定し、身だしなみのよいことを好み、上品で礼儀正しいことを重んじ、性のことなどは、口に出すことも、書くことも一切否定したのであるが、後期に至るとこれらは形式化され、極度に外面化されて、取りすましや偽りが押しつけられるようになった。結婚という複雑な、困難な、しかも根本的には性的な、両性間の関係にとって唯一の正しいあり方は、「完全なる清純さ」であると当時は考えられていたので、当然のことながら、そのようなものはなかなか得ることができず、社会の多くの者は恐らく実生活では無視してしまったのである。しかし、一方、文学上の性の描写に関する限りにおいては、性に関する言葉はあくまでも言うべからざる言葉であり、下品で、不潔なものであった。従って、小説における恋愛事件も、もちろん、その終りは幸福な結婚を求め、夫婦間の関係は宗教的にも厳格である必要があった。それ故、トマス・ハーディは「日蔭者ジュード」(1896)を書いたため、道徳的に不謹慎な書物と酷評され、遂にこれに抗議するため筆を絶ててしまい、ハヴァロック・エリスの「性心理学研究」6巻(1889)は猥褻のかどで起訴され、遂に発禁処分を受けた。

一口に言えば、ヴィクトリア朝においては、身だしなみのよいことが道徳律の規準であり、あらゆる行動の規準であったのである。身だしなみのよさが教養人の規準であり、象徴であったのである。しかし、この傾向は間もなく極端に走り、あらゆるものを皮相的に見るようになり、遂には、いわゆる「ヴィクトリア朝的偽善」を社会にもたらす結果となった。そしてまた、ロレンスが嫌悪したのは、正にこの「偽善」であった。中でも、「性における偽善」に対してロレンスは憤然とし、激しい憎悪を感じたのである。彼は、単にこの「セックスにおける偽善」を憎悪しただけでなく、彼の全身全霊をもってこれと戦ったのであった。

19世紀末に見られたワイルドらのデカダンス運動は、「反ヴィクトリア朝偽善」を旗じるしにはしているが、彼らは一切の既成道徳を倒錯させることと、病的官能を追求することによって、これを実現しようとして既に失敗している。ロレンスは彼らとは異なり、現代を拒否して原始への復帰を唱え、現代では滅びてしまった古代の生命感に溢れる肉体の世界の再現

を夢見たのである。「我々の欲することは、我々の偽りの非有機的な関係、殊に金銭に関する関係を打ちこわして、宇宙、太陽、大地との関係、人類、国民、家族との生きた有機的な関係を再建することである。まず太陽と共に出発せよ、さすれば、他のことは徐々に、徐々に行われるであろう¹⁾。」

（注）1) *Apocalypse*

2. 血 と 知

ロレンスによれば¹⁾、アダムは、ちょうど野性の動物がその相手を知るようにしてその生命の根源からその相手を知ったのであるが、これは頭で知ったのではなく、^{ブラッド}血で知ったのであった。血で知ること、本能、直観というものは頭脳に先行するものなのである。また、頭で意識することは、血で意識することを消してしまい、血を消耗させ、我々すべての者の中に、肉体的なものと精神的なもの、血と精神の間に根本的な敵意がある、つまり、頭脳は血を喰い、血は頭脳によって実際に破壊されてしまうことになる。アダムもまた、りんごの実を食べてからイブと交りをもった時、以前何度もしたこととは変りがなかったのに、意識の上では違うものをもつようになった。イブも同様であった。彼らは自分らのしていることに注目し、自分らの身に起こっていることを注視した。彼らは^{マインド}知^{スピリット}ことを望んだのである。そして、これこそ——それを行^{マインド}う^{スピリット}ことではなく、それについて^{マインド}知^{スピリット}ることこそ罪の誕生なのである。

しかし、長い間、人々は頭脳と精神によって人間は完全に成り得るのだと信じていた。そして、この傾向は、キリスト教と、資本主義文明化された精神による近代社会の機械万能主義の影響を受けて増大して行った。だがロレンスはこのような傾向を好まなかった。彼はこのことは近代の教育に大いに影響されていると考えた。彼によれば、教育で最も重要なことは、明らかに精神面ではなく、また、教育の真の目的は、観念的に、あるいは精神的にものを知るということでもなかった。子供の発達段階のすべては、その偉大な、ダイナミックな中心から起こるもので、絶対的に精神的

なものではない。精神的活動を導入することは、ダイナミックな活動を阻止することであり、ダイナミックな発達をだめにしてしまうことである。観念は人間がこれまでに侵された中でも最も危険なばい菌である。しかも、観念は、それが常に悪であるにも拘らず学校教育という注射によって、あるいはまた新聞などによって、我々の頭脳に導入される。そしてこの時、我々はもう死んだも同然になってしまう。教育の目的は知ることではなくて、存在することなのである。知ることは失うことですらある。我々はできるかぎり、我々自身を知らなければならない。しかし、それは、単に知ることのためではなくて、少くとも我々自身であるためなのである。我々自身であることということは、言葉の真の意味において、男が男らしさを持ち、女が女らしさをもつことを意味する。我々はただ知らずにすまずことを学ぶためにのみ知る必要があるのである。人間意識の最高の教えとは、いかに知らずにすませるかという方法を学ぶことである。これは、いかに精力的にあの偉大な源、即ち性から生くべきかということであり、頭から、即ち自動的に、あるいはある欲望をもった頭脳から起こる観念や原理などによって動かされて、機械のように静かに生きることではない。ある一つの純粹の観念を実行に移すことは、あらゆる生命の死を意味する。生命というものは、深い、自己責任に基づく、自発的な、あらゆる個人の中心から、個人々々の間のダイナミックな関係という重要な、観念的でない範囲において、生きられなければならない。女性に、ある観念に基づいて行動するよう教えることは、彼女の女らしさを永遠に破壊してしまうことを意味する。女性に自我意識を起こさせることは、彼女の魂が砂袋のように味気ないものになったことを意味する。このことは男性にとっても真実である。故に、教育とは、男女両性の各々の性質を、その本当の充実さまでに至らしめることを意味すべきである。——即ち、ロレンスは、近代社会における男女は、その教育の最初から、自分達の肉体を否定するように導かれてき、肉体と精神との間の相克が起っているのであるから、我々はまず、今日の教育を血に基づく、もっと真実に基づく教育に改革しなければいけないと批判しているのである。

(注) 1) *Fantasia of the Unconscious*

Studies in Classic American Literature

3. 性

上述のようにロレンスは「知」を否定し、「血」の重要性を高唱した。しかして、その「血」とは一体何であろうか。ロレンスにとって、それは、^{セックス}「性」であった。

ロレンスによれば¹⁾、セックスとは、我々の意識の最も深い奥底のものであり、それは完全に非観念的なもの、非理知的なものなのである。それは、純粋な「血の意識」なのである。それは血の最も根本的な意識であり、我々の中にある純粋に物質的な意識に最も近いものなのである。それは、魂がほとんど眠っている時の夜の意識なのである。

ロレンスにとって、セックスとは、個々の女性の中にある血の方へ、個々の男性の中にある血が偏^{ポラライゼーション}って行く作用なのである。セックスとは男性の個性的な血液が女性の個性的な血液と磁極関係に立つことであって、セックスの結合とは男女のダイナミックな磁性を結合させることである。セックスにおいて我々は、我々の基本的な、最も根原的な存在をもつのであり、ここにおいて我々は、根原的な接触をもつのである。我々のこの根原的接触は、下腹部叢と仙骨神経節から行われるのであり、その時男性と女性の暗い力が火花を散らすのである。彼にとってセックスとは、人間が男と女に分れており、消極的、反発的磁性によって男を女から離れさせるが、窮極的には肉交という長く無限に変化に富むものに向って男と女を惹きつける磁力的欲望、即ち衝動を意味した。極点に達する肉交を伴わないセックスは、人間関係においては、完全なセックスとは言えず、これは去勢された男を男と言えないのと全く同様である。肉交こそセックスへの根原的な鍵であり、我々はこれを純粋に保つことが大切である。もっとも、純粋とは言ってもこれは、少年少女間の観念的な、不毛の純潔さを意味しているのではなく、それは、男の中にある純粋の男らしさ、女の中にある純粋の女らしさを意味するのである。

ロレンスの最も望んだものは結婚の神聖さと男女間の貞潔さである。彼

の澄んだ心は、世の人々の「貞潔さ」と「結婚生活」の中に大きな虚偽を見出した。ロレンスはある著²⁾の中で「結婚の永遠性を意識することは男女間の内的平和にとって必要欠くべからざるものであり、貞潔さへの本能は恐らく我々が性と称する強いコンプレックスの中でも最も根強い本能である。真のセックスのあるところには必ず貞潔さを求める情熱がある。我々の精神が肉体と調和していて、その間に均衡が保たれ、精神と肉体が互いに相手を尊重し合うのでなければ、人生は生きるに値いしない」と言っているが、彼は、「男女間の理解ある暖い思いやり」と「性生活における^{ハーモニー}調和」の両者が相俟って、1人の男性として、また女性として、真に人間らしい生活をつくることができると考えたのであって、この時初めて、貞潔という観念も生まれてくるのである。セックス抜きで貞潔の観念は彼にとっては虚偽であった。ロレンスが、セックスを罪惡視したり、蔑視したりすることを憎悪したのは当然である。

またロレンスにとっては、セックスを伴わない精神のみの愛は罪惡でさえあった。彼は「^{ラブ}愛」という言葉をあまり好まなかった。むしろ、「^{インゲネス}やさしさ」という言葉を好んだ。彼は、男女はお互いに暖い理解をもって結婚し、結婚後は、1人の男性、1人の女性として、やさしく接すべきであると考えたのである。彼は、近代社会において不潔と見なされ、罪惡視されてきたセックスに新しいモラルを打ち立て、セックスそのものを、モラルや人格と結びつけようとしたのである。

ロレンスは、20世紀になってますます増大してきた機械主義と、それに伴う進歩主義や合理主義の世の中であって、それらによって疎外されてしまった人間の魂を、肉体を、セックスを通して回復しようとしたのである。人間が機械の奴隷となり、人と人とは、利害打算によってのみ結ばれ、離れる、精神の砂漠の中であって、セックスを通して、心の通う故郷を、共通感覚を回復しようとしたのである。しかし彼のこの思想は世に受け入れられず、このため、彼は、時に傷つき、時に怒り、時に絶望しながら、病軀をおして世界を彷徨したのである。

（注）1) *Fantasia of the Unconscious*

2) *A Propos of Lady Chatterley's Lover*

4. 猥 褻

ロレンスはその著¹⁾の中で、次のように「わいせつ」について定義している。「わいせつな感じというものは精神が肉体を軽蔑し、恐れ、肉体が精神を嫌悪し、これに反抗する時にのみ起こるものである。」「性感情に悪意をもち、これに恥をかかせ、これを墮落させようとする欲望と共に性の興奮が存在するときわいせつ文学の要素が入りこむのだ」と。ロレンスにとって、セックスは決してわいせつなものではない。それどころか、それは「美」と同義語でさえあった。彼にとって、セックスと美の関係は、炎と火の関係の如きものなのである²⁾。従って、セックスを嫌うことは美を嫌うことなのである。生き生きとした美を愛することは、セックスに敬意を払うことなのである。セックスと美とは分けることのできないもので、それはちょうど生命と意識のようなものである。故に我々はセックスに対して敬意をもたなければならない。現代文明の一大不幸はセックスに対する異常なまでの嫌悪感にある。現代における男女の深い心理的疾患は、生き生きとしたセックスへの彼らの直感力が萎縮している状態なのである。それ故、彼らは、もしセックスと性的衝動を美しく、正直に受け入れることができないならば、この異常な傾向から逃れることはできないのである。

観念と行動、言葉と行為、これらは二つの分離した意識の形式であり、二つの分離した生活である。我々は極度の誠実さをもって、それらの関連性を保たねばならない。しかし、我々は、考えている間は行為しないし、行為している間は考えようとしない。我々にとって最も大事なことは、我々が観念に応じて行為し、行為に応じて考えることである。しかし我々は、考えている間は真に行為することができないし、行為している間は真に考えることができない。これら二つの状態—観念と行動は、互いに排他的関係をもっている。ロレンスは、男も女も、皆が、セックスを十分に、完全に、正直に、そして清潔に考えることができるようになることを望んだ³⁾。

つまり、我々すべての者がセックスを理解するために、セックスを十分に、完全に、正直に、そして清潔に知らねばならないと考えたのである。貞潔さは、観念と行動のバランスによってのみもたらされ得る。しかし、わいせつさは、この観念が「肉体という現実」を軽蔑し、恐怖する時に起こる。即ち、男と女が、彼らの性的行動を不潔なものとか、恐ろしいものとか考えたり、肉体が、精神が考えることを嫌悪し、それに反撥した時、つまり、我々が、精神の判断をかりることなく、肉体だけで行動する時に起こるのである。その時、我々は、肉体の尊厳にふさわしい観念をもっていないので、観念そのものが不潔なものと考えられるようになり、この結果、性行為が、人類に許されている偉大な創造的行為であることをやめて、退屈な、自慰的な、自動的に繰り返される行動にまで墮落してしまうのである。それ故、わいせつさは、我々がセックスを正直に、十分に考えながら行為し、観念が行動とバランスを保っている時には起こらない。今や我々の為すべきことはセックスを言葉の真の意味において完全に行なうことなのである。彼自身の言葉を借りれば⁹¹、彼の最後の長篇「チャタレー夫人の恋人」は、上述のごとく、セックスを、人々が、十分に、完全に、正直に、清潔に考えることができるようにと望んで書かれたのであった。結婚を別にしてもセックスはありうるが、セックスを抜きにした結婚生活はあり得ない。彼は続けて次のように言っている、「たとえ完全に満足のゆくまで性行為ができなくも、せめて、セックスについて完全に、明快に、考えようではないか。何も書いてない真白い紙のように、処女とか処女性を口にするのは、すべて全くのナンセンスである。若い男女というものは、歳月だけがときほぐすことのできる、性的感情と性的思考の、混沌として沸き立っている苦悶のもつれのごときものである。何年もセックスについて正直に考え、何年もセックスと苦しんで戦ううちに、やっと我々の到達したいと思っているもの、我々の真の完成した貞潔さ、完全なる自我にたどりつくのである。その時、我々の性行為と性思想とが調和し、一方が他方を妨げることがなくなるのである。」と。

我々は、かつて、美術や医学上においてわいせつなものとして取扱われ

たものが、たとえその当時は赤裸々すぎ、わいせつとまで考えられたものであっても、後になってわいせつではないと考えられるようになった例をいくつも過去の文化史上で知っている。つまり、芸術や科学が、昔の書なら人間生活の美点として取扱えなかったものを、まじめに、正しく扱う時、その新しい意義が見出され、更に、あらゆる人間に共通した考えにまで発展するのである。そしてこの発見の根本において、生きるという意識が変化し、正常なものとなり、これまで扱われていたものがわいせつではなくなるのである。ここにロレンスがボッカチオのデカメロンを推した真の意味がある。ボッカチオ、チョーサー、シェイクスピアらは、セックスを真に、率直に、赤裸々に扱った作家たちであった。しかしセックスをそのように扱うことは、世間一般の人々が、過去において非合理にもおおいにかくされ、抑圧されていたものを美しいものと思うような、新しい意識をつくることである。ロレンスは19世紀の道徳のために、その真実をおおいにかくされていたセックスの新しい意味を確立し、セックスが確かに人間生活の中に存するばかりでなく、その生活がセックスに基づいて考えられねばならないという考えを推進したのであった。

- (注) 1) *A Propos of Lady Chatterley's Lover / Pornography and Obscenity* 2) *Sex versus Loveliness*
 3) 4) *A Propos of Lady Chatterley's Lover*

5. 道 徳 律

性生活においてなされる性行為そのものは、何ら善悪にも、美醜にも、関係はない。しかし、我々は皆、性生活に関することはかくしておきたいという感情をもっているということは否めない事実である。これが「恥じらいの感情」であり、この感情に大衆の健全な性道徳という秩序に基づいている。もし性行為が大衆の面前で行なわれるようになるならば、性に対する恥じらいの感情が傷つけられ、性に対する大衆の健全なる秩序と、健全なる風紀が破壊され、遂には国家の滅亡にまで至るであろうという人がある。しかしこの意見は必ずしも当を得てはいない。我々はもう一度性に

対する我々の感覚を考え直してみる必要がある。

性に関することを恥じらう感情とは一体何であろうか。それは全く生まれつきの、生物学的のものであり、我々が性に目覚めるのと同時に起こるものである。そしてそれは、我々の過去における性に対する考え方、つまり、我々が過去において性は汚らわしいものであるとか、恥ずかしいものであるとか言ったその態度に起因しているのである。すなわち、性は罪深く、汚らわしく、醜いものであるから人目からかくさるべきものであるという清教徒主義的考え方が、我々の考え方の根本になり、我々は決して性について口にすべきではない、我々はできるだけ性に関することはかくしておくべきだという風習を形成したのである。そしてこれが、一般大衆のもつ宗教心と結びついて、ある種の道徳的意味をもつようになり、社会秩序の維持に重大な影響を与える結果になったのである。

しかし、人間本能の解放が叫ばれてから既に久しく、人々は、性に対する無知の結果、反って、男女の健康な性が破綻をきたすことを認識して、我々は性に対する新しい意識をもたねばならないと言っている今日、上述のごとき考え方は、既にその道徳的意義を失っているといっても過言ではない。もちろんそのような考え方は、今だに多くの人々の道徳感情、道徳感覚といったものに影響を与えてはいるが、これとてこれまでの習慣に流されているの感は否めないであろう。

性生活は、経済的生活や宗教的生活と同様、我々の社会生活の中で最も重要なものの一つである。性生活を美しく、まじめに享受することは、我々が文化を築き、国民生活の根本的基礎・内容確立するのに関係がある。故に我々が、性が人間性及び人間生活にとってもっている意義をまじめに考え、我々の人間生活を性を通して改善しようと試みることは、非常に重要なことである。

ロレンスはロマンチストではあったが、熱烈な反ヴィクトリアンであった。とりわけ彼は、19世紀英国文明を支配していた清教徒主義を憎悪した。彼は、19世紀は、人間性を全く破壊してしまうことを意図した去勢された世紀であると思ったのである。そこで彼は、19世紀における性に関す

る虚偽と戦おうと欲したのであった。

ロレンスは他の多くの作家を、性と性愛に対する不正直さと虚偽ゆえに非難している¹⁾。たとえば、彼によれば「カルメン」や「アンナ・カレニナ」は、愛がからみ合い、死に至る、陳腐な近代悲劇にすぎない。彼にとっては、死が唯一の清く美しい情熱の結末であるということは大きな虚偽であった。ウロンスキーは罪を犯したが、それは彼が敬虔な気持から望んでしたことであり、カレニナは、アンナにとって思いやりのない、冷血な夫であったから、ウロンスキーとアンナの間に愛が芽生えるのは当然であり、真実のものである。しかるに彼らは、姦通のゆえに、最後は死に至る。そこでロレンスはトルストイを「嘘つきじじいめ！」と非難する。彼によれば、この非劇は、彼らの姦通に発するのではなく、彼らの上流階級社会への恐怖から始っているのである。彼らの罪は性的のものではなく、社会的のものである。彼らの悲劇は、彼らが誠実に、情熱をもって生きる勇気が無かったことに発する（この点、チャタレー夫人とその恋人メラーズは勇気があった）。この勇気の無さこそ、彼らにとって罪悪であったのだとロレンスは考える。同様に、彼にとっては、ネフリュードフも、誰も望まず、信じてもない善意をひけらかした愚かな男にすぎない。更に彼はダンテをも非難した。死んだベアトリーチェを永遠の恋人と憧憬しながら妻とベッドを共にしたからである。彼はペトラルカも非難した。

ロレンスにとって、ブロンテの「ジェーン・エア」はわいせつでさえあった。この小説の中で、ロチェスターとジェーンは互いに強い愛情を感じる。しかし彼らは、ロチェスターの妻が生きている間は姦通になることを恐れ、彼が火傷のため醜い顔になるまで性的交渉をもたない。これは作者が、性を、汚い、不潔な、忌むべきものとして、もてあそばうとした結果であって、この態度こそわいせつなのだ²⁾とロレンスは言うのである。ジョイスもまた彼の酷評の対象になっている。「ユリジーズ」の最後はこれまで書かれたうちで最も汚らしい、最も品位に欠ける、最もわいせつな、最も不潔なものとまで言っている。フローベールの「パルムの僧院」は空虚さのみ残る下らない作品、「サランボ」は邪悪にみち、誠実さに欠けると

まで言われている。

ロレンスの賞讃した作家は、ボッカチオ、ホイットマン、ブレイクなどである。彼によれば、ボッカチオは、セックスが人間生活の本質的部分であり、人間思考の普遍的一部をなすと理解しているし、ホイットマンは、偉大なモラリストで、偉大な血の変革者で、人間の魂は肉体よりも優っているとする古い道德観念を打ちくだいた最初の人であった。またブレイクは、霊肉調和の完全な人を、大胆に、直截に生きた最後の近代人であった。

彼自身、あらゆる自己矛盾をもっていたにもかかわらず、ロレンスは、産業主義や機械文明は人間の奴隷化と墮落をもたらすという信念を終生変えなかった。彼は、産業主義、機械、機械の番人になり下った人間共は悪であるから、これらは皆無くさなければならないと信じていた。そこで彼は、物質的には産業主義と機械文明に基づき、精神的には清教徒主義に基づく、ヴィクトリア朝道德によって規制されている、彼以外のすべての人の性習慣と性行動はすべて間違いで、彼だけが正しいと信じ、ここに、新しい道德律を打ち立てようとしたのである。

では、彼の称えた新しい道德律とは何であろうか。彼は次のように言っている。

「芸術で最も大切なことはモラルである。美でもなければ装飾でもなく、ましてや気晴らしでもない。モラルである。芸術で最も大切なことはモラルである。

だがそれは、熱のこもった、言わず語らずして理解される^{モラリティ}道德律であって、決して教訓的なものではない。精神よりもむしろ血液を変える道德律なのである。先ず第一に血を変えよ、その後に精神が従うのである³¹」

「深い根を持ち、あまり抑圧されなければ、木はまっすぐに伸びるものである。愛とは自発性のあるもので、自発的な、有能な魂から出てくるものである。それを人為的に原理とすれば、純然たる悪となるように、観念³²または理想に基づく道德もまた純然たる悪である³¹」と。

その著書中で何度も述べているように、ロレンスが新しい道德律の確立

の必要性を痛感したのは第一次世界大戦直後のことである。彼は大战後の荒廃の中から、言葉の真の意味における、人間の健全なる道德律を創ろうと意図したのである。世界大戦は人間の神への希望、キリスト教の教義と救いを打ちくだいてしまったが、これはロレンスにとって絶好の機会であった。彼は、男と女に人間としての真の生活を回復してやろうとしたのである。彼は現代の人間はこれまで機械の奴隷になり、過去の因襲や道德律をひたすら守ることが、真の生活であるという誤った態度をとってきたと思った。彼は、これら諸悪の原因は、セックスを軽蔑し、無視し、それを罪と見なすところにあると考えた。肉体への反動、肉体の諸機能の萎縮、人間生活の機械化がすべての文明国に拡がっている。彼は、男と女が彼らの真の肉体を取り戻し、互いの暖い愛情を回復し、肉体的生活を通じて、セックスの美しさをその生命の炎とを感じるようにならねばならぬという彼の思想を実現させることによって、これらの病弊から男女を救うことができると考えた。つまり、彼は、セックスを美しいもの、敬意を払うべきものとして再認識することによって、新しい道德律を確立しようとしたのである。

オルダス・ハックスレーによれば、ロレンスにとって性的経験の意義とは次のようなものであった。即ち、性的経験においては、聖なる他者に関する直接的、非精神的知識は、いわば、一個の焦点——暗黒の焦点に集中される。そして我々は父なる神を、測るべからざる神を、知るべからざる神を、我々の中に、女の中に知るのである。女性は、我々が出入りする門である。女性によって我々は父なる神のもとに帰るのである。しかし、キリストの変容を目のあたりに見た人々と同じく、盲いて、かつ無意識にである——とロレンスは考えたのである。このように彼にとっては、性的経験とは、殆んど宗教的とも言うべき厳粛なものであった。世の多くの宗教家や道德家がロレンスをひどく非難してきたが、彼らは、彼を非難できるほど宗教的で、道德的であり得たであろうか。彼らは「宗教」や「道德」を殆ど盲目的に信じ、それらを人々に押しつけてきただけではないであろうか。むしろ我々は、ロレンスの方が、より宗教的で、道德的である

と言えないであろうか。ロレンスは決して初めから性の問題を考えた作家ではない。人間は如何にしたら互いに真に愛し得ることが出来るか——即ち、むしろ、キリスト教的愛の思想を實踐するには如何にあるべきかを生涯かけて求めたと言えるであろう。（因みに、彼が死の直前に書いた「チャタレー夫人の恋人について」その他の評論には、彼がカトリシズムに抱いていた親近感が随所に見受けられる。彼はプロテスタンティズムを攻撃したのであって、宗教改革前のカトリック教会を称揚している。彼自身、「私はキリスト教の偉大さを確かに承知している。だがそれはあくまで過去の偉大さである。私だって紀元後400年に生まれていれば、真実の、熱烈なキリスト教徒になっていたであろう⁵⁾」と言っているが、異色のロレンス論の著者牧師タイヴァトンが、「ロレンスは長生きすれば牧師になったであろう⁶⁾」と言っているのと考えあわせ興味深い。）

トルストイは人間の犯した罪は性欲が原因であると考えた。彼はキリスト教的精神と意志をもって、彼自身の肉欲本能を押さえつけようとして終生悩み続け、それが幾多の長篇小説や評論となって結実はしたが、最後には悲劇的な死を遂げた。しかしロレンスは、問題の出発点こそ似てはいるが、考え方は正反対で、トルストイの悲劇から逃れる道を模索し、性と性愛を道徳律にまで称揚することによってこれを完成しようとしたのである。

〈未完〉

(注) 1) *Assorted Articles / Sex Literature and Censorship / Studies in Classic American Literature / The Letters of D. H. Lawrence, etc.*

2) *Studies in Classic American Literature*

3) *Fantasia of the Unconscious*

4) *Huxley's Introduction to The Letters of D. H. Lawrence*

5) *Selected Essays*

6) *D. H. Lawrence and Human Existence*